だいわ元気まつりで演じられた能舞　笠松峠 鬼人お松

# なくしちゃ～いけん わしらの神楽

## 大和町連合神楽保存会

昭和40年代、古来より大和地域で舞っていた神楽の保存と継承を目的に、大草神楽保存会が発足され、それをきっかけに大和町内に9つの神楽保存会が立ち上がりました。

平成元年、お互いが連携し、技術の錬磨と文化の継承のため、大草（昭和40年設立）・和木（昭和42年設立）・上徳良（昭和43年設立）・大具（昭和44年設立）・萩原（昭和47年設立）・福田（平成9年活動停止）の6神楽保存会で、連合神楽保存会を設立しました。現在は、5団体で構成され、会員は、20代から80代の約35人。主な活動として、毎年秋に開催される研修会とだいわ元気まつりに出演しています。

各保存会の活動としては、それぞれの団体ごとに練習し、市内外の神社の例祭、秋祭り、各地のイベントなどで、毎年約15回、神楽を披露しています。練習は、主に地区の神社や公民館で仕事を終えた夜間に行われます。

大和地域で舞う備後神楽は、県北の神楽と違い、化粧や華やかな衣装はありません。「御神祇」「能舞」「五行祭」の3つのパートに分かれる、ほかにない独特の演目で構成されます。

楽屋と呼ばれる太鼓・すりがね・笛で舞に合わせてリズムを奏で、太夫と呼ばれる舞人が面を着け、演じます。会員は、交代で楽屋と太夫をこなします。侍と、三吉と呼ばれる道化者が、方言を使い駄洒落を並べ、面白おかしくやり取りする能舞は、人気の演目の一つです。

「子どものころから娯楽もなく、神楽が楽しみでした。太鼓の音を聞くと自然と体がリズムに合わせて動き、ウキウキしました。風邪を引いていても神楽を見ると治っていた」と第5代大和町連合神楽保存会会長の渡部陽之助さんは神楽の魅力を語ります。また、「備後神楽を忘れてはいけない。声が掛かれば、どこへでも舞いに行きます」と熱い思いをにじませます。しかし、どこの保存会も後継者不足が悩みの種。会員が少なくなれば存続も危ぶまれるなど課題もあります。その中で、後継者の育成と郷土の伝統芸能の継承、青少年健全育成として成功しているのが、大草神楽子供研究クラブです。

### 神楽を知れば、神楽がもっと楽しくなる！

三原地域に伝わる備後神楽は、大別して、御神祇、能舞、五行祭に分けられます。

**御神祇**（ごじんぎ）

御神祇とは、神を迎え、場を清めるために行うもので、「清女の舞」「四神舞」「中央」「神舞」「悪魔祓」の5つの神祇があります。その中から「清女の舞」と「悪魔祓」だけを舞うこともあります。

**清女（きよめ）の舞**

狩衣で烏帽子を被り、手に鈴と幣を持ち舞う二人舞

**四神舞**（しじんまい）

4人で東西南北（木・金・火・水）の神を迎える四人舞

**中央**（ちゅうおう）

四神舞に土の神が加わる五人舞

**神舞**（じんまい）

座清女（ざきよめ）と呼ばれる一人舞

**悪魔祓**（あくまばらい）

猿田彦の舞ともいわれ、手に扇や刀を持ち、鼻高面をかぶり舞う一人舞

# 子どもたちへ つながれる 伝統の心

## 大草神楽子供研究クラブ

地域の伝統芸能である神楽を通じて、子どもたちに郷土愛をはぐくませたい。その思いから昭和54年に始まった大草神楽子供研究クラブは、今年で結成30年を迎えます。設立のきっかけは、当時の大草小学校の児童が郷土文化の学習で神楽を題材に取り上げ、大草神楽保存会がその指導にあたったこと。以来、同保存会が子供研究クラブを設立し、地域の子どもたちに、神楽の伝承を行なっています。

現在、メンバーは5歳から小学6年生までの14人。年間10～15回、市内外の祭りや神社の例祭で神楽を奉納しています。

子供神楽ということで、神楽を簡略することはありません。備後神楽の形式をきちんと受け継ぎ、御神祇から能舞まで舞います。高学年が中心となりながら、学年に応じてそれぞれができるパートを受け持ち、メンバー全員で一つの舞台を完成させます。神楽に欠かせない太鼓や笛、すりがねの演奏も子どもたち自らで行います。

御神祇で、低学年の小さな子どもがかわいらしい舞を見せると、観客の表情には皆、笑みが浮かびます。

続いて能舞を舞うのは高学年。演目は「八重垣」です。見せ場では、舞台上に大蛇4体が渦を巻き、須佐之男命と格闘します。全長約8mもある大蛇を一人ひとりが堂々と操る姿は圧巻です。大人顔負けの見事な舞に、客席からは大きな拍手がわき上がります。

舞台は長時間に及び、台詞は長く、昔の言葉。しかし、子どもたちは自分のパートをしっかりと覚え懸命に演じます。その姿に、観客は魅了され、終わりには惜しみない拍手が送られます。

礼に始まり、礼に終わる―子どもたちがクラブで大切にしている教えです。神楽を披露する際、最後に必ず全員で客席にあいさつをします。週1回の練習では、神楽以外の作法も学ぶ子どもたち。一年間クラブに入り練習すると、演技力だけでなく、人間的にも大きく成長するといいます。

現在、子どもたちの指導にあたる保存会のメンバーは、発足当初の子供研究クラブの卒業生が中心です。

「良い循環が生まれています」と顔をほころばせるのは代表の上田昭未さん。「この巡りが後世に続き、伝統芸能である神楽を通して地域が活性化されるよう、イベントなどにも勢力的に参加し神楽を広めていきたいです。神楽が好きだから、と一生懸命に頑張る子どもたちの思いをこれからも大切にしていきたい」と笑顔で展望を語る上田さんの表情には、郷土芸能に対する誇りが感じられました。

迫力ある悪魔祓を舞う子供研究クラブのメンバー

**能舞**（のうまい）

演目は、須佐之男命（すさのおのみこと）が大蛇を退治する八重垣や、佐々木厳流、播州皿屋敷など40種類にも及びます。神話や民話をもとに作られた演目も多くあります。

侍以外の出演者は、すべて面をつけています。

舞よりも、語りを中心としており、方言を使った漫才のような、やりとりが、観客を引き込み、会場を盛り上げます。

**五行祭**（ごぎょうさい）

県無形民俗文化財に指定されている、5人の王子を中心とした物語。備後神楽を語る上で欠かせないものですが、今では、見ることが難しくなっています。

四神舞

# つながれ つながれ 神楽の絆

## 久井神楽保存会

能舞　宮本左門之助義明

昭和17年に再結成し、旧久井町では無形民俗文化財に指定されていた久井神楽保存会。当時、秋祭りには、神楽が必ず舞われ、生活の中に神楽が溶け込んでいました。しかし、時代の流れの中で、地域に愛された神楽を舞う人も少なくなっていました。存続も危ぶまれたこともありましたが、平成9年に八幡町の有志が加わり、現在の会員は10人。神社の例祭や敬老会などで、年間約7回の神楽を披露しています。

秋の神楽シーズンの前には、週に1～2回の練習を行い、本番に備えます。60代が中心となるメンバーは、和気あいあいとした活動の中にも、人前で演じるという緊張感を持って、神楽に取り組んでいます。

秋には本郷町の末広稲荷大明神の例祭で毎年行われるという神楽の奉納。今年も約30人の観客を前に太鼓や笛、すりがねの音が響きました。御神祇の中から清女の舞と悪魔祓が舞われ、締めは「宮本左門之助義明」という演目の能舞が演じられました。観客をまき込んだやりとりや芸の細かさは見る人を惹きつけ、魅了します。

清女の舞

地域の人から人へと受け継がれてきた神楽。昔は先生と弟子の間には厳しい師弟関係がありました。先生は神楽について優しく教えてくれることはありませんでした。手書きの台本を自分で作り、見よう見まねで覚えていくしかありませんでした。時代の流れの中で、そういう厳しさはなくなりましたが、厳しい時代があったからこそ現在まで神楽が受け継がれてきたことも事実です。

「先輩たちから受け継がれてきた伝統芸能を自分たちの代で終わらせたくないと思います。信頼できる仲間と一緒に、できる限り神楽を続けていき、一人でも多くの人に神楽の魅力を伝えていきたいです」とメンバーは口をそろえて、笑顔で語ります。

代表の西谷繁騎さんは後継者不足という課題を踏まえ「自分たちだけで神楽を続けていくにはどうしても限界があります。地域に根づいた神楽の魅力を伝えていくことで、若い仲間が増え、地域で守っていくという意識につながればうれしいです。そのことが結果的には、地域づくりや、昔どこにでもあったコミュニティを再生できるのではないかと思います」と生き生きとした表情を見せました。

悪魔祓

豊田流福光社中神楽師　金川顕二郎さん

## 続けることが大切です

神楽を始めて25年。数少ないプロの神楽師として活躍する金川顕二郎さんは、9歳のとき、大草神楽子供研究クラブで神楽を始めました。「好きで好きで、神楽のことが頭から離れませんでした」と当時を振り返る金川さん。その神楽への真剣で熱い思いは、指導する子どもたちにも伝わります。

「神楽は、神様に舞をお供えする厳かなものです。役に成りきり舞うすがすがしさは、何ともいえません」と神楽の底知れぬ魅力を語ります。「神楽を守るには、毎年休まず続けることが大切です」と語る言葉には、プロとして歴史をつなぐ強い決意が感じられました。

萩原神楽保存会　松井浩二さん

## 拍手や笑顔が励みになります

萩原神楽保存会に今年5月入会した松井浩二さんは、「地元の先輩に勧められて神楽を始めました。小さいころは神楽を見ることはありませんでしたが、神楽を舞うと、お客さんからの拍手や笑顔がとても励みになり、楽しいです。知らないことが多く、昔の習慣などが分かり勉強になります」と神楽を始めたきっかけや、魅力を語ります。「まだ始めたばかりですが、将来は、能舞の道化者である三吉の役柄を演じてみたい。そして、若い世代の自分たちが、神楽を盛り上げていきたいです」と後継者不足の中、熱く夢を語ります。

大草神楽子供研究クラブ
左から　谷本稜香さん、沖田未歩さん、福定里穂さん

## 神楽を続けていきたい

秋の神楽シーズンには、土・日曜日も関係なく、神社や秋祭りの会場に足を運びます。本番前の練習は、4時間に及ぶこともあります。

小学3・4年生から神楽を始め、子供研究クラブとしての出演も今年で最後。「勉強との両立が大変だったけど、神楽が好きだったので続けられた」と振り返ります。

「最初は、人前で舞うことが、恥ずかしくて、うまくできなかったけど、今では堂々と演技ができるようになりました」と自信を見せます。

「将来は大草神楽保存会に入り、神楽を続けていきたいです」と仲良し3人組の夢は広がります。

## 人から人へ、受け継がれる伝統芸能　次代に残すべき大切な三原の宝

神楽を支え、神楽に支えられているまち、大和町。地域で守り、地域の人によって、伝えられてきた伝統芸能。だいわ元気まつりで神楽の上演を見たときに、会場全体で、神楽を楽しむ姿に胸を打たれました。ステージで演じている人だけが主役ではなく、会場全体がステージとなり、会場全体の人が主役と感じられるものがそこにありました。

三原には、神楽以外にも、素晴らしい伝統芸能や伝統文化がたくさんあります。しかし、次代に引き継ぐべき、この地域文化は今、後継者不足という大きな問題も抱えています。

大草神楽子供研究クラブの活動は、最近失われつつある、地域の大人と子どものつながりを、強めるものとなっています。さらに、子どもたちにとっても、周りで支える人たちにとっても、神楽の大切さを再認識できる活動にもなっています。

この特集が、皆さんの身近にある伝統芸能や伝統文化、地域の祭りについて、あらためて考え、これからも守り・伝えていく手掛かりになればと願っています。

――特集　夢を舞い　人が集い　まちが笑う
三原に息づく伝統芸能・神楽
終わり――